茨木 周平
IBARAGI Shuhei

家具における廃材の活用に関する研究—作品「Debris furniture」及び研究報告書

Study on practical use of the scrap wood in furniture : Work “Debris furniture” with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域

「Debris furniture」
370×896×366
ラワン、タモ、楓、栗、桜、欅、ウォルナット
2012

序章

本研究は、廃材が新たに価値を持ち、有効な素材となるための造形要素とは何かを考察することが目的である。廃材の活用について、技術的な工程方法は解説されているが、造形要素についての検討に及ぶものは、ほとんど見受けられない。また、廃材を活用した家具と一言でいっても活用されている廃材、またはその活用の方法は多種多様に存在する。そのため、家具の中でどのような廃材をどのようなかたちで活用しているのかという現状と実態が見えにくい。このことにより「廃材を活用した家具」という言葉からゴミや要らない物を寄せ集めて作られた家具というようなイメージを持たれているのではないだろうか。そこで、本研究では、廃材を活用した家具の現状の把握を踏まえ、どのような活用によって、廃材が造形の中で新たに価値を持ち、有効な素材となるか、その要因について考察している。具体的な方法として、現代の廃材を活用している家具を調査し、素材(廃材)別に分類し、廃材の捉え方から扱う側の取り組み方などの考察を踏まえ、3つの姿勢に体系づけた。そして、それらの中から廃材を新たに価値付ける姿勢に焦点を当て、その活用に繋がる先人の知恵と工夫を調査と制作によって検証し、論考した。

第1章　廃材を活用した家具の現状

本章では、家具において活用する廃材について調査し、廃材を扱う姿勢について考察を行った。本章で取り上げる廃材とは、家具の一部だった部品や家屋の解体で発生する部材、または林業で行われる間伐によって発生する間伐材である。このような廃材はそのほとんどが堆肥や燃料として、一時的な消費を目的に活用される。これに対して、筆者が本研究で論じる廃材の活用とは、引き続き木材として長期的な使用を目的とした活用である。廃材を活用した家具において使用されている素材は大きく4種類あり、活用する廃材によって「作家的姿勢」「企業的姿勢」「クラフトマン的姿勢」の3つの姿勢に分けて体系付けられる。これらは、それぞれ廃材を「存在」、「資源」、「材料」として捉えている。その中で長期的な使用を目的とした活用は「クラフトマン的姿勢」にあてはまる。そこには、職人的な視点を通した技術が介在しており、廃材に新たな価値を持たせる要因であることが明らかになった。

第2章　廃材の活用におけるクラフトマンの定義

本章ではクラフトマンやその技術ついて考察した。その方法として、日本の古民家の移築を行う大工や文化財の補修を行う宮大工を具体例にあげ、歴史や概要を含めて論述し、クラフトマンについての定義付けを行った。クラフトマンとは、大工や宮大工のように、ひとつひとつの木の性質、癖、を読み取り、それらを生かせる発想や工夫をもった技術者である。大工や宮大工の木の「強さ」と「軽さ」を生かす工夫には、用途に適した木を配置する「適材適所」、木材同士の接合で用いられる「継手」や「仕口」がある。木材を現代の機械加工のように均一化して使用するのではなく、木ひとつひとつの個性や癖を長所として受け止め、建物の構造の中で活かすことで、本来ならば処分されるはずの素材を優良な部材として生かすことができるのである。

第3章　現代の家具における廃材の活用

本章では2章での考察を踏まえ、1章で取り上げた「クラフトマン的姿勢」にあてはまる家具の中に、どのような技術があるのかを知るため、現代の廃材を活用した家具を再度取り上げて考察した。「クラフトマン的姿勢」にあてはまる家具には、それぞれ違う形の廃材を材料として活かす発想と工夫があり、制作者がクラフトマンとして、ひとつひとつの材の長所を見極め、活用がされている。そのため、作られる家具の中には、新材とは違う色や形、質が造形にあらわれる。その結果、新しい材料から作られた物でも痛々しい廃材から作られた物でもない、高い完成度を持った物になるのである。

第4章 作品「Debris furniture」及び研究報告書

本章では修了作品「Debris furniture」に至るまでの経緯やその中での考察を含めた制作の過程をまとめた。本研究における制作では4つの家具作品を制作した。いずれも、学校で使われた後、廃棄された家具の部材を材料として活用している。修了制作では、廃材の他に過去の制作で余った異なる樹種の端材に着目し、強度を持たせるために活用した。これは、身の回りにある不要になった端材を材料として捉え、制作を行う経験になった。その活用によって、様々な樹種の色や質感が作品の表情として造形に現れた。このことから、素材の性質や状態を読み取り、それらの長所を生かし、短所を改善しようとする姿勢が、素材を生かす造形に繋がることが理解できた。

終章　まとめ

廃材が新たに価値を持ち、有効な素材になるには、作り手が廃材を「材料」として捉える姿勢を持つことから始まる。それは、素材に寄り添い、生かそうとするクラフトマン的な姿勢である。クラフトマンとは、大工や宮大工のように、素材を生かす発想や工夫をもった技術者である。クラフトマン的な発想や工夫とは、素材を精選し、その性質や形が物の中で生きるように、適材適所で活かすことである。大工が曲がった木を建物の梁に使うように、廃材の「形」や「質」、「表情」を家具の中に生かそうとする姿勢が、廃材を新たな価値をもった有効な素材にしていくと本研究では結論づけた。